

【一】次の文章は、北山忍『文化が違えば、心も違う? —文化心理学の冒険』の一部で、サブサハラ・アフリカの独特の文化システムについて書かれたものである。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。※出題上、一部省略した部分がある。





問一 二重傍線部①「カコク」、②「翻」、③「ザンテイ」、④「タンポ」、⑤「育」について、漢字はその読みを、カタカナはその漢字を答えなさい。

問二 傍線部A「自己促進的協調と呼んだ集団力学」とは、どういうことか。七〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部B「アメリカ大陸にもオセアニアにも現在大型動物は野生で存在するのはわずかである」のは、なぜか、その理由を一〇〇字以内で説明しなさい。

問四 次のア～オについて、この文章の内容と合致している場合は○、合致していない場合は×として答えなさい。

ア 東アジアの受験競争では、異なる集団同士での競争が奨励され、結果的に学級全体の利益につながるため、競争と協調は必ずしも矛盾しない。

イ アメリカンフットボールや科学実験室では、競争意欲を欠く人は、評価されにくく、競争への意欲こそが士気や成果の向上に不可欠と理解されている。

ウ サブサハラ・アフリカの自己促進的協調は、東アジアや西洋文化と本質的に同じであり、他地域でも社会全体に広く浸透している。

エ 文化を理解するには過去の分析が不可欠であり、数千年単位の生態条件を考慮することが重要で、このアプローチは憶測として退けるべきではない。

オ アフリカが長期間無視されてきたのは、人々の関心がアフリカの人々ではなく、ライオンやサイなど大型動物に集中してしまったことが原因である。

問五 傍線部C「アジアとラテンアメリカに広がり、社会的調和の重要性の比率を増した」理由を筆者はどのように考えているか、次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 稲作や小動物の狩猟では、集団の生存が多くの個人の勤勉さに依存し、平等な貢献が求められたため、社会的調和の重要性が高まったから。

イ アジアとラテンアメリカでは、スター・ハンターの存在が集団の繁栄に不可欠であり、その競争が社会的調和を促進したから。

ウ 稲作や小動物の狩猟は、個人の能力よりも集団の協力を不要にしたため、社会的調和の価値が相対的に低下したから。

エ アジアとラテンアメリカでは、資源が豊富で競争が不要だったため、社会的調和は自然に形成され、文化的価値として重視されることはなかったから。

オ アジアとラテンアメリカにおける社会的調和の重要性は、植民地支配による文化的影響が主因となっているから。

問六 サブサハラ・アフリカの文化は、現代世界が直面する社会的な分断解決に示唆を与える可能性があると筆者は述べている。その理由を、本文に即して一〇〇字以内で説明しなさい。

【二】次の文章Ⅰ・Ⅱは「平中」という色好みの男を主人公とした物語の一部である。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

男（平中）が中宮に仕える美しい女房を見て恋に落ち、文を交わしてついには逢瀬を果たした。

Ⅰ 『平中物語』

そののち、文もおこせず、またの夜も来ず。かかれば、使人つかひなど、わたると聞きて、「人にしもありありて。①かう音もせず、みづからも来ず、人をも奉れたまはぬこと」などいふ。心地に思ふことなれば、くやしと思ひながら、とかく思ひみだるるに、四五日になりぬ。女、ものも食はで、音ねのみ泣く。ある人々、「なほ、かうな思ほしそ。人に知られたまはで、異ことごとをもしたまへ。さておはすべき御身かは」などいへば、ものもいはで籠りゐて、いと長き髪をかき撫でて、尼に挟みつ。使ふ人々嘆けど、かひなし。

来ざりけるやうは、来て、②つとめて、人やらむとしけれど、\*官つかさの督かみ、にはかにものへいますとて、率ひらていましぬ。さらに帰したまはず、からうして帰る道に、\*亭子ていじの院の召使来て、やがてまゐる。\*大堰おほゑにおはします御供に仕うまつる。そこにて二三日は酔ひまどひて、もの覚えず。夜ふけて帰したまふに、\*いかむとあれば、方ふたがりたれば、みな人々つづきて、たがへにいぬ。この女いかに思ふらむとて、\*夜さり、心もとなければ、文やらむとて書くほどに、人うちたたく。「たれぞ」といへば、「\*尉だうの君に、もの聞えむ」といふを、さしのぞきて見れば、この女の人なり。「文」とてさしいでたるを見るに、切髪を包みたり。あやしくて、文を見れば、

a 天の川空なるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり  
 ②尼にになるべしと思ふに、③目くれぬ。返し、男、

b 世をわぶる涙ながれて早くとも天の川にはさやはなるべき  
 \*ようさり、いきて見るに、いとまがまがしくなむ。

Ⅱ 『大和物語』

「いとほあさましきに、さらにももの聞えず。みづからただ今まゐりて」となむいひたりける。かくてすなはち来にけり。そのかみ女は\*塗籠ぬりかめに入りけり。ことのあるやう、さはりを、つかふ人々にいひて泣くことかぎりなし。「ものをだに聞えむ。御声をだにしたまへ」といひけれど、さらにいらへをだにせず。④かがるさはりをば知らで、なほたたいとほしさにいふとや思ひけむとてなむ、男はよにいみじきことにしける。

(注) \* 官の督…役所の長官 \* 亭子の院…宇多法皇 \* 大堰…京都市西京区嵐山。大堰川の流域

\* いかむ…女が仕える御所に行くということ \* 夜さり・ようさり…夜の時分

\* 尉の君…男（平中）のこと \* 塗籠…周りを壁で塗りこめた小部屋

問一 『平中物語』に影響を与えたとされる、一人の男の恋愛遍歴を中心とする一代記の形で描かれた「歌物語」について、作品名を漢字で書きなさい。

問二 波線部(い)「つとめて」、(ろ)「目くれぬ」、(は)「あさましき」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- (い) ア 懸命に イ 出勤する ウ 帰宅する エ 翌朝  
 (ろ) ア 目を背けた イ 見る気が起きない ウ 目の前が暗くなった エ 見ずにいられない  
 (は) ア 気の毒だ イ 驚くばかりだ ウ 腹立たしい エ むなし

問三 傍線部①「かう音もせず」について、「音」の意味に注意して具体的に説明しなさい。

問四 次の文章は、A Iを用いて文章Iを要約したものである。この文章は、二重傍線部「女が自ら訪ねてくる」が誤っている。A Iの誤りについて説明した□の空欄(1)、(2)にそれぞれ適切な言葉を補って答えなさい。

平中はある女と親しくしていたが、用事や命令が重なり、しばらく彼女のもとを訪れることができなかった。ようやく会いに行こうとするが、方角が悪いとされ、結局会いに行けずじまいだった。

男は女が自分をどう思っているか気になり手紙を書いていると、突然女が自ら訪ねてくる。そして、切った髪を包んだ手紙を渡す。手紙には、別れを告げるかのような悲しい和歌が添えられていた。平中はその内容から、女が出家して尼になろうとしていることを悟った。

A Iは「男」を訪ねてきたのが「女自身」と誤解しているが、(1)が訪ねてきたと解釈すべきだった。A Iがこのように読解したのは、(2)が理由の一つとして考えられる。

問五 和歌aについて、傍線部②「尼になるべしと思ふ」をふまえ、現代語訳しなさい。

問六 和歌bの説明として誤りがあるものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「世をわぶる」の「世」は、ここでは男女の仲を意味しており、「私とあなたの行く末を悲観する」という現代語訳になる。

イ 「ながれ」は「流れ」と「泣かれ」の掛詞である。また、「流れ」は「川」の、「泣かれ」は「涙」の縁語になっている。

ウ 「早くとも」の「とも」は逆接仮定条件の接続助詞であり、「あなたの流す涙がいくら激しくても」という現代語訳になる。

エ 「さやはなる」の「さや」は「早や」で早くという意味であり、第三句の「早く」と反復して女の悲しみの深さを強調している。

オ 「べき」は当然の助動詞で、「流れる涙が天の川になるはずだ」という現代語訳になり、男が女の気持ちに同情している。

問七 和歌bの後、『大和物語』では文章Ⅱのように話が続く。傍線部③「かかるさはりをば知らで、なほたたいとほしさにいふとや思ひけむ」について、文章Iをふまえ、必要な言葉を補って現代語訳しなさい。

【三】次の文章は『貞観政要』の一節である。唐の太宗はかねてから入貢していた西域異民族の有力者に「可汗（＝支配者・王）として認める」という使者を送った。その使者がまだ帰国しないうちに、太宗は別の者を送って西域の名馬を買わせようとしていた。その場面に続く次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。なお、設問の都合で訓点を省略したところ、文字を改めたところがある。

魏<sup>\*</sup> 徵<sup>\*</sup> 諫<sup>メテ</sup> 曰<sup>ハク</sup>、「今<sup>スルハ</sup> 發<sup>スル</sup> 使<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 立<sup>ツル</sup> 可<sup>ク</sup> 汗<sup>ヲ</sup> 為<sup>ス</sup> 名<sup>ト</sup>。可<sup>ク</sup>

汗<sup>ハ</sup> 未<sup>ダ</sup> 定<sup>メ</sup> 立<sup>ツ</sup>、即<sup>チ</sup> 詣<sup>イタリテ</sup> 諸<sup>ニ</sup> 国<sup>ニ</sup> 市<sup>カハシム</sup> 馬<sup>ヲ</sup>。彼<sup>ズ</sup> 必<sup>ズ</sup> 以<sup>テ</sup> 為<sup>サン</sup> 意<sup>ハ</sup>

在<sup>リ</sup> 市<sup>フニ</sup> 馬<sup>ヲ</sup>、不<sup>ト</sup> 為<sup>メナラ</sup> 專<sup>ラ</sup> 立<sup>ツルガ</sup> 可<sup>ク</sup> 汗<sup>ヲ</sup>。可<sup>ク</sup> 汗<sup>ハ</sup> 得<sup>トモ</sup> 立<sup>ツ</sup>、則<sup>チ</sup> 不<sup>ラン</sup>

甚<sup>ダシクハ</sup> 懷<sup>ハ</sup> 恩<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup> 得<sup>レ</sup> 立<sup>ツ</sup>、則<sup>チ</sup> 生<sup>ゼン</sup> 深<sup>ク</sup> 怨<sup>ヲ</sup>。諸<sup>ニ</sup> 蕃<sup>カバ</sup> 聞<sup>レ</sup> 之<sup>ヲ</sup>、且<sup>ニ</sup>

不<sup>ラント</sup> 重<sup>ンゼ</sup> 中<sup>ニ</sup> 国<sup>ヲ</sup>。但<sup>シ</sup> 使<sup>セ</sup> 彼<sup>レ</sup> 土<sup>ニ</sup> 安<sup>ク</sup> 寧<sup>ク</sup>、則<sup>チ</sup> 諸<sup>ニ</sup> 国<sup>ノ</sup> 之<sup>ノ</sup> 馬<sup>ヲ</sup>、

不<sup>レ</sup> 求<sup>フ</sup> 自<sup>ラ</sup> 至<sup>ル</sup>。

昔<sup>ニ</sup>、漢<sup>ノ</sup> 文<sup>ノ</sup> 有<sup>リ</sup> 下<sup>ニ</sup> 献<sup>ズル</sup> 千<sup>ニ</sup> 里<sup>ノ</sup> 馬<sup>ヲ</sup>。一<sup>ノ</sup> 者<sup>ハ</sup> 帝<sup>ハク</sup> 曰<sup>ク</sup>、「吾<sup>ハ</sup> 吉<sup>ク</sup> 行<sup>ハ</sup>

日<sup>ニ</sup> 三<sup>ニ</sup> 十<sup>ニ</sup>、凶<sup>ニ</sup> 行<sup>ハ</sup> 日<sup>ニ</sup> 五<sup>ニ</sup> 十<sup>ニ</sup>、鸞<sup>らん</sup> 輿<sup>よ</sup> 在<sup>リ</sup> 前<sup>ニ</sup>、属<sup>ニ</sup> 車<sup>ハ</sup> 在<sup>リ</sup>

後<sup>ニ</sup>、吾<sup>ハ</sup> 独<sup>リ</sup> 乘<sup>リテ</sup> 千<sup>ニ</sup> 里<sup>ノ</sup> 馬<sup>ヲ</sup>、将<sup>ルニ</sup> 以<sup>テ</sup> 安<sup>クニ</sup> 之<sup>ノ</sup> 乎<sup>ト</sup>。」乃<sup>チ</sup> 償<sup>ヒテ</sup> 其<sup>ノ</sup>

道<sup>ニ</sup> 里<sup>ノ</sup> 費<sup>ヲ</sup> 而<sup>シテ</sup> 返<sup>セリ</sup> 之<sup>ヲ</sup>。又<sup>ニ</sup> 光<sup>ク</sup> 武<sup>ノ</sup> 有<sup>リ</sup> 下<sup>ニ</sup> 献<sup>ズル</sup> 千<sup>ニ</sup> 里<sup>ノ</sup> 馬<sup>ヲ</sup> 及<sup>ビ</sup>

宝<sup>ニ</sup> 劍<sup>ヲ</sup>。一<sup>ノ</sup> 者<sup>ハ</sup> 馬<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 駕<sup>ガシ</sup> 鼓<sup>ニ</sup> 車<sup>ニ</sup>、劍<sup>ハ</sup> 以<sup>テ</sup> 賜<sup>フ</sup> 騎<sup>ニ</sup> 士<sup>ニ</sup>。

今<sup>ニ</sup> 陛<sup>下</sup> 凡<sup>ソ</sup> 所<sup>ニ</sup> 施<sup>スル</sup> 為<sup>ス</sup>、皆<sup>ハ</sup> 邈<sup>はるかニ</sup> 過<sup>ニ</sup> 三<sup>ニ</sup> 王<sup>ノ</sup> 之<sup>ノ</sup> 上<sup>ニ</sup>。

奈何<sup>ソ</sup>至<sup>リテ</sup>此<sup>ニ</sup>欲<sup>スル</sup>為<sup>ニ</sup>孝<sup>ラント\*</sup>文・光武<sup>ノ</sup>之下<sup>ト</sup>乎。又魏<sup>ノ</sup>文帝<sup>ノ</sup>求<sup>ム</sup>市<sup>コトヲ</sup>西域<sup>ノ</sup>大珠<sup>ヲ</sup>。蘇<sup>そ\*</sup>則<sup>そく</sup>曰<sup>ハク</sup>「若<sup>シ</sup>陛下<sup>ノ</sup>及<sup>バ</sup>四<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>不<sup>シテ</sup>求<sup>メ</sup>自<sup>ラ</sup>至<sup>ラン</sup>求<sup>メテ</sup>而<sup>ル</sup>得<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>ル</sup>足<sup>ラ</sup>貴<sup>ブ</sup>也<sup>ト</sup>」陛下<sup>ト</sup>縱<sup>ヒ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>慕<sup>フ</sup>漢<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>高<sup>ク</sup>行<sup>フ</sup>可<sup>ケン</sup>不<sup>ル</sup>畏<sup>レ</sup>蘇<sup>ノ</sup>則<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>正<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>耶<sup>ト</sup>。太宗<sup>ノ</sup>遽<sup>ニ</sup>令<sup>ム</sup>止<sup>メ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

〔貞観政要〕「納諫第五」による

- (注) \* 「魏徵」…太宗の側近 \* 「蕃」…異民族 \* 「中国」…世界の中央の国。ここでは唐帝国のこと  
 \* 「漢文」…漢の文帝。名君とされる \* 「千里馬」…名馬のこと  
 \* 「吉行く五十」…「平時の行幸は日に三十里、行軍時の行幸は日に五十里進む」の意  
 \* 「驚輿」…旗を載せる輿 \* 「厲車」…添え車 \* 「光武」…後漢の光武帝。名君とされる  
 \* 「駕」…引かせる \* 「施為」…行い \* 「三王」…伝説上の三人の名君のこと  
 \* 「孝文」…前出の漢の文帝のこと。 \* 「蘇則」…魏の政治家

問一 傍線部①「名」の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名目 イ 名譽 ウ 襲名 エ 署名 オ 著名

問二 傍線部②を「彼の国を安寧にさせれば、諸国の馬は求めなくても、ひとりでに我が国にやってくるでしょう」と訳せるように返り点を施しなさい(送り仮名不要)。

問三 傍線部③「安」、④「乃」、⑥「若」の本文での読みを、現代仮名遣いで答えなさい。

問四 傍線部⑤「之」、⑧「之」の指示内容をそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい(訓点不要)。

問五 傍線部⑦「可不畏蘇則之正言耶」を現代語訳しなさい。

問六 魏徴の諫言の論点について、次の二つの観点に沿って簡潔に説明しなさい。

〈観点①〉 使者が帰国する前に名馬を買い求めることによって起きる弊害

〈観点②〉 蘇則の言葉を引用した意図

問七 唐代には「辺塞詩(西域の風土、そこを旅する孤独感や出征の苦しみ等を詠んだ詩)」が作られた。次のうち「辺塞詩」の作者と詩の正しい組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 王翰「涼州詞」 イ 杜甫「春望」 ウ 屈原「離騷」  
 エ 白居易「長恨歌」 オ 陶潜「歸去來辭」